

## 16. 柔道学習者の柔道に対する意識について

—態度及び原因帰属様式の考察を中心に—

関東学園大学	高橋	進
東京学芸大学	貝瀬	輝夫
日野第一中学校	浅野	哲男
新宿高校	川島	直司
都立駒場高校	斎藤	聡
和歌山大学	矢野	勝
講道館	平野	弘幸
愛光学園	濱田	初幸

## 16. Consciousness Towards *Judo* Among *Judo* Class Students: Attitude and Attributional Styles

Susumu Takahashi (Kanto Gakuen University)

Teruo Kaise (Tokyo Gakugei University)

Tetsuo Asano (Hino Daiichi Junior high school)

Naoshi Kawashima (Sinjuku High School)

Satoshi Saito (Komaba High School)

Suguru Yano (Wakayama University)

Hiroyuki Hirano (Kodokan)

Hatsuyuki Hamada (Aiko Gakuen)

### Abstract

The purpose of this study was to investigate the following: (1) attitude towards *judo* among junior high school, high school, and university students learning *judo* in physical

education classes, including the variation in attitude by age; (2) the attributional styles of each of the three groups towards *judo*; and (3) the relation between causal attributions and attitude.

The subjects of this research range from junior high school to university students. A longitudinal study would have required several years, so a horizontal study was conducted. Both attitude and attributional styles toward *judo* were measured by the use of a questionnaire prepared by Takahashi. The scales of attributional styles originated from Weiner's theories. The data were analyzed by factor analysis techniques. Regression analysis was applied to the scales of factors obtained in two questionnaires. The results were:

1. Seven attitude factors toward *judo* were extracted from factor analysis in junior high school students. Six factors were identified in both high school and university students. The factors of each group were nearly similar in the factor structure. These results suggest that the attitude towards *judo* is very similar in all groups.
2. On one hand, it was recognized that *judo* had a desirable effect on the body and mind. On the other hand, it was confirmed that *judo* was not highly evaluated on brightness, refreshment, and beauty in sports.
3. It appears that the questionnaire of attributional styles in the study were applicable to all subject groups, as the factors were described by a simple structure.
4. Each subject had a tendency to attribute positive events to effort, and did not tend to attribute negative events to ability. This indicates that the subjects attributed a high achievement motive to *judo*.
5. Subjects had a tendency to attribute positive events to their teachers, and therefore, to not attribute negative events to their teachers. It is inferred that students and teachers had good rapport.
6. There was a positive relationship between causal attributions and attitude. It is suggested that increasing the achievement motive of *judo* students will favorably change their attitude towards *judo*.

## I. 緒言

柔道は周知の通り、「武道」の一種目として、学校体育の中に位置付けられ、今後も益々、その文化的・運動学的・教育的重要性が追求されるに違いない。つまり、国際社会にあって柔道の持つ運動文化的価値は、IJF加盟国が160ヶ国を越えるのを見ての通り、見逃すことが出来ないまでに大きくなった。今や日本柔道は、メッカ的存在である。さすれば、日本柔道界は競技としての柔道は素より、教育的価値を含んだ柔道の更なる普及・発展をなおざりにすることは許されまい。

高橋、貝瀬、矢野、川嶋らは、以上のような柔道の国際化に目を向けながら、国内における教育としての柔道の発展に寄与すべく、柔道に対する態度、原因帰属、不安認知、有能感といった学習者の心理的諸側面を明かにするための一連の研究<sup>6)9)10)11)12)13)14)15)16)</sup>を進めてきた。また、学習に関する条件を実験的に操作して、一定の学習前後に如何にその態度が変容を来すかという研究も何件<sup>17)</sup>が行っている。更に、態度と原因帰属様式、原因帰属様式と不安・運動に対する有能感と

の因果関係についても、社会心理学的・心理学的・統計学的見地から分析を施し一様な結果を得ている。

そこで、この論稿では、高橋、貝瀬、矢野らの一連の研究から柔道に対する態度及び原因帰属様式に関する結果をまとめる意味から、以下に挙げる事項について研究を進めていくこととした。

尚、対象は、男子生徒・学生のみとした。

①中学生、高校生、柔道履修大学生の柔道に対する態度、及び加齢による態度変容傾向。

②中学生、高校生、柔道履修大学生の柔道に対する原因帰属様式。

③①と②の因果関係について

ところで、このような結果を指針として、実際の授業に応用していく実践的研究こそ意義深いと考えられよう。矢野らの論稿にそれは任せることとし、ここでは、割愛する。

## II. 研究方法

ここでは、①中学生、高校生、柔道履修大学生の柔道に対する態度、及び加齢による態度変容傾向。並びに、②中学生、高校生、柔道履修大学生に対する原因帰属様式。③①と②の因果関係について明かにする。

ところで、本来、態度の差異や変容について云々する場合は、同一対象群による縦断的研究が望ましいと考えられる。しかしながら、中学生、高校生、大学生と長期間に渡る継続研究は時間的に困難を来す。そこで本稿では、中学生、高校生、及び大学生のデータを基に横断的であるが、比較・研究を進めることとした。

### 1. 調査対象・時期・学習条件

①中学生はA学園に在籍する男子中学2年生52名。調査時期については、平成4年7月。(学習内容はそれまでに受身・膝車・支釣込足・大腰・背負投「一本背負投」・本袈裟固が行われた。指導者は六段の専門家)

②高校生は、都立高校に在籍する男子高校3年生246名。調査時期は、平成2年6月。(調査高校は、週1回3年間継続して柔道授業を行っている。よって本対象者は、受身・膝車・支釣込足、大腰、出足払、背負投、釣込腰、体落、送足払、大外刈、大内刈、小内刈、本袈裟固、崩袈裟固、横四方固、縦四方固、上四方固、崩上四方固、十字絞、送襟絞等の内容について学習している。指導者は、五段の専門家)

③大学生は、K学園大学の一般体育実技で柔道を履修選択した一年生103名。調査時期は、平成5年6月。(学習内容は、受身、大腰、膝車、背負投、体落、出足払、本袈裟固、横四方固。指導者は、五段の専門家)

### 2. 調査内容

質問紙の内容は、以下の尺度から構成されている。

#### (1) 柔道に対する態度尺度

社会心理学者であるローゼンベルグやホブランドは、態度を三成分として、概念規定<sup>3)18)</sup>を行っている。本調査では、柔道に対する態度についての構造化を図るため、上述した三成分のうち二成分(感情的成分：柔道に対する感情、認知的成分：柔道を行うことで得られる効果)を中心にアンケートを作成した。

尚、項目の総数は40項目である。

#### (2) 原因帰属様式尺度

ポール・ラングランの提唱した「生涯教育」の概念は、柔道にも適用され、最近では、「生涯柔

道」ということばを聞くようになった。当然、学校体育の中で、柔道自身に触れることができれば、上述した「生涯柔道」への道は開かれる。そこで将来を占う意味においても、失敗や成功の原因認知が、今後の達成行動を決定するというワイナーの原因帰属理論<sup>1)</sup>に目を向け、柔道に対する学習者の原因帰属様式を測定することとした。

質問項目は、柔道の学習行動に含まれると思われる事態（原因帰属事態）と、それを引き起こすと考えられる原因（帰属因）から構成した。帰属因については、自分にそのような原因事態が起こったと仮定した時に、そのような帰属因がどの程度自分に当てはまるかを、「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答を求めた。原因帰属事態としては4事態が採用され、それぞれの事態ごとに好ましい事態（正事態）と好ましくない事態（負事態）を作成した。また、帰属因としては、上述したワイナーの内的—外的、及び安定性の次元に従い、「能力」、「努力」、「課題の困難さ」、「運」の4要因に加えて、学習場面ということを考慮して「先生」の要因を追加し5種題とした。

尚、原因帰属事態の具体的内容は、次の通りである。

- ①練習中相手をきれいに投げた・抑えた（投げられた・抑えられた）としたら
- ②試合をして勝った（負けた）としたら
- ③初めて習った技が、すぐにできた（なかなかできない）としたら

以上からこの尺度の項目数は、3（原因事態）×2（正・負事態）×5（帰属因）の30項目である。

### 3. 分析方法及び手順

（1）態度質問紙の各項目は、「非常に感じる」から「全く感じない」までの5件法で回答を求め、それぞれに5点から1点の得点を与えた。また、柔道の態度構造を明かにするために、以下に示す手順に従って因子分析を試みた。

- ① 態度に関する40の項目の評定値に対して、共通性のある主因子解による因子分析を施した。
- ② その結果、固有値1.0以上である因子を抽出した。
- ③ 更に、得られた因子行列に対して、Normal・Varimax 回転を施した。
- ④ 因子の解釈・命名については、各対象群によって若干の差異があるので結果の項で記すことにする。

また、解釈・命名可能な因子について、因子平均得点を算出した。（因子の個人得点 <以降態度尺度得点> = 各因子に含まれる項目の合計得点 ÷ 項目数）

（2）原因帰属質問紙の各項目は、前述したように、「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答を求め、それぞれに5点から1点を与えた。更に本質問紙によって各対象学校群の学習場面における原因帰属様式の測定が可能か否かを明かにするために、原因帰属様式の構造的妥当性の検討を3—（1）と同様な手順で因子分析を試みた。

（3）それぞれの態度尺度を従属変数、帰属因尺度を独立変数として、重回帰分析を行った。尚、変数選択には、一括投入法を採用した。また、重回帰分析に使用する変数は、各尺度得点である。

以上本研究におけるすべての計算処理は、東京学芸大学大型計算機センター spssx プログラムによって行われた。

## III. 結果と考察

### 1. 中学生、高校生及び大学生における因子の抽出及び態度構造の群間差

Varimax 回転後の抽出因子及び因子負荷量を、中学生については表2に、高校生については表4に、大学生については、表6にそれぞれ示した。

この結果、中学生において解釈・命名可能な因子は、7因子であった。(回転後の貢献度の合計は、全分散の69.8%・表1, 因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は原則として0.5以上とした)。

高校生では、解釈・命名可能な因子は、6因子であった。(回転後の貢献度の合計は、全分散の48.5%・表3, 因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は0.5以上とした)。

尚、大学生において解釈・命名可能な因子は、6因子であった。(回転後の貢献度の合計は、全分散の60.1%・表5, 因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は、0.4以上とした)。

1-1 中学生の柔道に対する態度の構造

(1) 第一因子に負荷量の大きな項目は16項目であった。

この16項目のうち、8項目が、精神の鍛錬の意識という観点から解釈され、6項目が体力の鍛錬という観点から解釈される。以上からこの因子は、運動の持つ心身鍛錬効果を想起させる因子と考えられる。しかしながら、残りの2項目「V12・重要な感じがする」「V20・武道的な感じがする」は、端的に柔道の武道性を示している。

そこで、これら2つの側面を併せて解釈し、この因子を武道的心身鍛錬因子と命名した。

(2) 第二因子については、「明るい」「楽しい」「さわやか」「はなやか」など、柔道を肯定する感情を表す項目から構成されていることにより、肯定的感情因子と解釈・命名した。

(3) 第三因子に含まれる項目は、「危険」「怖い」「痛い」など、柔道に対する逃避的な感情を表している。従ってこの因子を逃避的感情因子と命名した。

(4) 第四因子は、「きつい」「苦しい」等、柔道に対する逃避的感情を表しているものの、辛

表1. 相関行列の固有値 (態度に関する因子分析・中学生)  
Table 1. Eigenvalue of rotated factor matrix (attitudes toward Judo among junior high school students).

因子	固有値	%	acc.%
1	11.690	29.2	29.2
2	3.971	9.9	39.2
3	3.031	7.6	46.7
4	2.302	5.8	52.5
5	1.766	5.7	58.2
6	1.571	4.4	62.6
7	1.225	3.1	69.8

表3. 相関行列の固有値 (態度に関する因子分析・高校生)  
Table 3. Eigenvalue of rotated factor matrix (attitudes toward judo among high school students).

因子	固有値	%	acc.%
1	6.599	16.5	27.0
2	4.716	11.8	28.3
3	2.673	6.7	35.0
4	2.083	5.2	40.2
5	1.809	4.5	44.7
6	1.530	3.8	48.5

表5. 相関行列の固有値 (態度に関する因子分析・大学生)  
Table 5. Eigenvalue of rotated factor matrix (attitudes toward judo among university students).

因子	固有値	%	acc.%
1	8.368	27.0	27.0
2	3.418	11.0	38.0
3	2.159	7.0	45.0
4	2.081	6.7	51.7
5	1.338	4.3	56.0
6	1.259	4.1	60.1

表2. 態度に関する因子分析結果 (中学生)

Table 2. Rotated factor loadings and naming of factors  
(attitudes toward judo among junior high school students).

因子	項目	因子負荷量
F1: 武道の心身鍛練因子 (16項目)	V12・重要な感じがする	0.68350
	V20・武道的な感じがする	0.45342
	V21・健康になる	0.56032
	V23・力がつく	0.85986
	V24・持久力がつく	0.57063
	V27・運動がすばやくなる	0.66863
	V28・平衡性が向上する	0.59074
	V30・姿勢が正しくなる	0.57818
	V31・決断力がつく	0.75500
	V32・忍耐力がつく	0.77787
	V33・積極的になる	0.71504
	V34・協力的になる	0.55178
	V35・責任感が強くなる	0.62756
	V36・礼儀正しくなる	0.73645
V38・気持ちが落ち着く	0.56789	
V40・人を大事にする気持ちが強くなる	0.53470	
F2: 肯定的感情因子 (5項目)	V1・明るい感じがする	0.60512
	V2・楽しい感じがする	0.60452
	V3・さわやかな感じがする	0.50816
	V4・はなやかな感じがする	0.54106
	V5・近代的な感じがする	0.60705
F3: 逃避的感情因子 (3項目)	V7・危険な感じがする	0.81715
	V9・恐い感じがする	0.81433
	V10・痛い感じがする	0.74674
F4: 辛苦的感情因子 (2項目)	V8・きつい感じがする	0.80596
	V11・苦しい感じがする	0.82352
F5: 否定的感情因子 (3項目)	V16・ふるくさい感じがする	0.84465
	V17・暗い感じがする	0.71082
	V18・孤独な感じがする	0.77491
F6: 躍動的感情因子 (2項目)	V3・さわやかな感じがする	0.52162
	V14・ダイナミックな感じがする	0.69163
F7: 容姿向上因子 (3項目)	V6・スリリングな感じがする	-0.53412
	V22・プロポーションがよくなる	0.61478
	V26・体が柔らかくなる	0.66512

\* 因子負荷量0.5以上の項目を因子の解釈に採用した

さや苦痛を直接的に示した因子と言うことが出来る。よってこの因子は、逃避的感情因子と区別して、辛苦的感情因子と命名した。

(5) 第五因子に含まれる項目は、「古い」「暗い」「孤独」というように柔道を否定する感情を

表4. 態度に関する因子分析結果(高校生)

Table 4. Rotated Factor loadings and naming of factors  
(attitudes toward Judo among high school students).

因子	項目	因子負荷量
F1: 精神鍛練因子 (10項目)	V31・決断力がつく	0.43772
	V32・忍耐力がつく	0.37697
	V33・積極的になる	0.54310
	V34・協力的になる	0.73752
	V35・責任感が強くなる	0.65142
	V36・礼儀正しくなる	0.42742
	V37・正義感がつよくなる	0.63552
	V38・気持ちが落ち着く	0.48051
	V39・明るくなる	0.49025
	V40・人を大事にする気持ちが強くなる	0.61524
F2: 逃避的感情因子 (6項目)	V7・危険な感じがする	0.72385
	V8・きつい感じがする	0.74024
	V9・恐い感じがする	0.77803
	V10・痛い感じがする	0.72084
	V11・苦しい感じがする	0.70280
	V13・難しい感じがする	0.42332
F3: 体力鍛練因子 (6項目)	V23・力がつく	0.38693
	V24・持久力がつく	0.55237
	V25・スムーズな動きが身につく	0.66977
	V26・身体が柔らかくなる	0.53305
	V27・運動がすばやくなる	0.65313
	V28・平衡性が向上する	0.67104
F4: 肯定的感情因子 (5項目)	V1・明るい感じがする	0.68962
	V2・楽しい感じがする	0.65061
	V3・さわやかな感じがする	0.58426
	V4・はなやかな感じがする	0.67626
	V5・近代的な感じがする	0.48570
F5: 否定的感情因子 (3項目)	V16・ふるくさい感じがする	0.73245
	V17・暗い感じがする	0.79217
	V18・孤独な感じがする	0.60865
F6: 武道的感情因子 (2項目)	V19・男性的な感じがする	0.54180
	V20・武道的な感じがする	0.66150

\* 因子負荷量0.4以上の項目を因子の解釈に採用した

表す項目から構成されている。従ってこの因子は、否定的感情因子と命名した。

(6) 第六因子は、柔道の「ダイナミック」感、及びそれから受ける「さわやかさ」を示した因子であり、躍動的感情因子と命名した。

(7) 第七因子については、「プロポーションがよくなる」「体が柔らかくなる」の2項目を考慮し、容姿向上因子と命名した。

表6. 態度に関する因子分析結果(大学生)  
 Table 6. Rotated factor loadings and naming of factors  
 (attitudes toward Judo among university students).

因子	項目	因子負荷量
F1: 精神鍛練因子 (10項目)	V31・決断力がつく	0.40156
	V32・忍耐力がつく	0.48644
	V33・積極的になる	0.62892
	V34・協力的になる	0.67286
	V35・責任感が強くなる	0.76130
	V36・礼儀正しくなる	0.63910
	V37・正義感がつよくなる	0.52217
	V38・気持ちが落ち着く	0.66948
	V39・明るくなる	0.66962
	V40・人を大事にする気持ちが強くなる	0.86055
F2: 逃避的感情因子 (5項目)	V7・危険な感じがする	0.63006
	V8・きつい感じがする	0.68312
	V9・恐い感じがする	0.82297
	V10・痛い感じがする	0.77603
	V11・苦しい感じがする	0.78797
F3: 体力鍛練因子 (5項目)	V23・力がつく	0.78255
	V24・持久力がつく	0.43098
	V26・身体が柔らかくなる	0.70231
	V27・運動がすばやくなる	0.60261
	V28・平衡性が向上する	0.78445
F4: 肯定的感情因子	V1・明るい感じがする	0.79071
	V2・楽しい感じがする	0.56268
	V3・さわやかな感じがする	0.72571
	V4・はなやかな感じがする	0.63780
F5: 否定的感情因子 (4項目)	V5・近代的な感じがする	-0.54500
	V16・ふるくさい感じがする	0.75735
	V17・暗い感じがする	0.71996
	V18・孤独な感じがする	0.64943
F6: 武道的感情因子 (2項目)	V19・男性的な感じがする	0.77995
	V20・武道的な感じがする	0.75226

\* 因子負荷量0.4以上の項目を因子の解釈に採用した

#### 1-2 高校生の柔道に対する態度の構造

(1) 第一因子に負荷量の大きな項目は、V31~V40すべての項目であり、柔道を通して得ることのできる精神的鍛練効果を示した因子といえることができる。よってこの因子を精神鍛練因子と解釈・命名した。

(2) 第二因子に含まれる項目は、「危険」「きつい」「恐い」「苦しい」など、中学生の第三因子と第四因子を統合した因子といえることができる。しかしながらどの項目も柔道に対する逃避的感情を表している。従ってこの因子を、中学生の第三因子と同様に理解し、逃避的感情因子と命



名した。

(3) 第三因子については、いずれの項目の内容も身体の鍛錬的認知という観点から説明される。また、これらは体力の基本的要素とも考えられる。両観点からこの因子を体力鍛錬因子と命名した。

(4) 第四因子は、「明るい」「楽しい」など、いずれも柔道に対する肯定的感情を示す項目と考えられる。そこでこの因子を中学生の第二因子同様、肯定的感情因子と命名した。

(5) 第五因子に含まれる項目は、「古い」「暗い」「孤独な」の3項目であった。これらの項目は、中学生の第五因子と全く同様であり、柔道に対する否定的感情を表している。そこで、ここでも、否定的感情因子と命名した。

(6) 第六因子は、負荷量の大きな項目が2項目であり、いずれも柔道に対する感情的側面を示した内容であった。それらの項目「男性的な」「武道的な」は、柔道を単にスポーツと捉えることに留まっていない。特に「武道的な」は、直接的に柔道の武道性を示唆するものでもある。よってこの因子を武道的感情因子と命名した。

1—3大学生の柔道に対する態度の構造

表6を見ての通り、高校生において解釈・命名された因子と見事にオーバーラップする。

よって、第一因子から、「精神鍛錬因子」「逃避的感情因子」「体力鍛錬因子」「肯定的感情因子」「否定的感情因子」「武道的感情因子」と命名することとした。

中学生、高校生及び大学生について以上のような結果を得たが、同様に解釈される因子も数多く、3群間の態度構造の類似性が示唆された。

各対象ともに柔道の技術的な学習を進めた段階でアンケートを行っているため、3群間における因子の類似性の要因は、柔道実践によるところが大きいとも考えられる。よって、

表7. 態度尺度の平均得点 (中学生)

Table 7. Factor mean score and standard deviation (attitudes toward judo among junior high school students).

因子名	平均得点	S. D.
F1: 武道的心身鍛錬因子	3.226	.747
F2: 肯定的感情因子	2.375	.709
F3: 逃避的感情因子	3.378	.919
F4: 辛苦的感情因子	3.426	1.031
F5: 否定的感情因子	3.026	.974
F6: 躍動的感情因子	3.058	.938
F7: 容姿向上因子	2.936	.616

表8. 態度尺度の平均得点 (高校生)

Table 8. Factor mean score and standard deviation (attitudes toward Judo among high school students).

因子名	平均得点	S. D.
F1: 精神鍛錬因子	3.210	.590
F2: 逃避的感情因子	3.673	.730
F3: 体力鍛錬因子	3.508	.630
F4: 肯定的感情因子	2.450	.650
F5: 否定的感情因子	2.970	.760
F6: 武道的感情因子	4.276	.660

表9. 態度尺度の平均得点 (大学生)

Table 9. Factor mean score and standard deviation (attitudes toward judo among university students).

因子名	平均得点	S. D.
F1: 精神鍛錬因子	3.175	.691
F2: 逃避的感情因子	3.532	.770
F3: 体力鍛錬因子	3.486	.729
F4: 肯定的感情因子	2.560	.779
F5: 否定的感情因子	3.212	.765
F6: 武道的感情因子	4.105	.824

表10. 相関行列の固有値 (原因帰属に関する因子分析・中学生)  
 Table 10. Eigenvalue of rotated factor matrix  
 (attitudes toward judo among junior high school students).

因子	固有値	%	acc.%
1	8.871	22.2	22.2
2	6.069	15.2	37.3
3	5.958	14.9	52.2
4	3.296	8.2	60.5
5	2.693	6.7	67.2
6	1.819	4.5	71.8
7	1.269	3.2	74.9
8	0.986	2.5	77.4

表12. 相関行列の固有値 (原因帰属に関する因子分析・高校生)  
 Table 12. Eigenvalue of rotated factor matrix  
 (attitudes toward judo among high school students).

因子	固有値	%	acc.%
1	8.146	20.4	20.4
2	4.610	11.5	31.9
3	4.062	10.2	42.0
4	2.825	7.1	49.1
5	2.489	6.2	55.3
6	1.679	4.2	59.5
7	1.586	4.0	63.5
8	1.353	3.4	66.9
9	1.156	2.9	69.8
10	1.106	2.8	72.5

表14. 相関行列の固有値 (原因帰属に関する因子分析・大学生)  
 Table 14. Eigenvalue of rotated factor matrix  
 (attitudes toward judo among university students).

因子	固有値	%	acc.%
1	4.94867	16.5	16.5
2	3.49653	11.7	28.2
3	3.32798	11.1	39.2
4	2.60396	8.7	47.9
5	2.23173	7.4	55.4
6	1.96510	6.6	61.9
7	1.38326	4.6	66.5
8	1.22029	4.1	70.6
9	1.14014	3.8	74.4

本研究の結果は次のようなことを物語っている。

①本研究においては、中学生の学習初期の段階において既に、かなり明確な態度構造の形成がなされている。このことは、学習初期の指導がその後の柔道に対する態度構造に多大な影響を与えるということを示唆している。つまり、学習初期、いわば導入期の柔道学習の工夫の重要性を再確認することになった。

②また、高校生(3年生)と大学生の因子構造が見事にオーバーラップしたが、高橋らの先行研究<sup>12)</sup>「大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について—認知的側面と感情的側面の比較—」においても同様な結果を得ている。このことは、①で述べたように学習の初期段階で形成された態度が、「一般的には、態度は、一旦形成されると安定に向かう力が働き持続的である<sup>17)</sup>」とされているように、安定的であるということを示唆していよう。

③II-2-(1)に示したように、質問紙の内容が、HovlandやRosenbergの言う態度概念<sup>3)</sup>の三成分のうち、認知的成分と感情的成分の二成分から構成されているために、抽出された因子も、柔道が及ぼす身体や精神に対する効果を示した因子(認知的側面)と柔道に対する肯定や否定的感情を示した因子(感情的側面)に大別される結果となった。これは、上記②であげた高橋らの研究<sup>17)</sup>においても認められた傾向である。

ところで、前述した高橋らの研究<sup>17)</sup>において、「柔道学習で形成される身体的、及び精神的鍛錬効果に対する認知は、二元論的な立場から

一元論的なものへと変容・統合されていくことが認められた」とある。しかしながら、本研究においては、中学生の第一因子（武道的心身鍛錬因子）において既に、一元論的認知がなされている。また、高校生・大学生では、逆に二元論的認知がなされている。このことは、先行研究の結果と矛盾することであるが、学習段階のどの場面で態度構造が変容・統合されていくのか、また、否かを縦断的研究によって再認する必要性が示されたと言えるのではないか。

いずれにしても、以上のような態度構造の変容・統合が、単に加齢によるものではないことは自明の理である。

④どの対象群においても、柔道の武道性を示す因子（中学生の第一因子、高校生、及び大学生の第六因子）が認められた。このことは、「武道」としての柔道を学習者が認識しているためとも捉えられる。

各対象群の因子構造から以上のような結果・考察が得られたが、次項では、各対象群の因子得点から更に考察を求めたい。（ただし、本研究では、各群の類似因子ごとの因子得点間の検定は行わなかった。）

## 2. 中学生、高校生及び大学生の柔道に対する態度の評価

表7には、中学生、表8には、高校生、表9には、大学生のそれぞれの抽出因子の平均得点及び標準偏差を示してある。

その結果、中学生、高校生、大学生では、柔道に対する感情的側面や認知的側面に同様な傾向が認められた。それらを要約すれば以下の如くである。

①柔道が、精神や身体に及ぼす効果である認知的側面に関しては、どの群ともにやや高い価値

表11. 原因帰属因子に関する因子分析結果（Varimax 回転後・中学生）

Table 11. Rotated factor loadings and naming of factors  
(attitudes toward judo among junior high school students).

項目番号	帰属因子	事 態		因子番号	因子負荷	項目番号	帰属因子	事 態		因子番号	因子負荷
		正負	内 容					正負	内 容		
2	先		練習	1	.83497	10	努	練習	4		.80192
12	負	新しい学習	.77775		20	負	新しい学習	.75691			
22	生	試 合	.72351		30	力	試 合	.85304			
9	能	練習	.59438		2	先	練習	.82436			
19	負	新しい学習	.68989		12	正	新しい学習	.80333			
29	力	試 合	.62979		22	生	試 合	.70503			
4	能	練習	.90505	2	.90505	1	課	練習	6		.72619
14	正	新しい学習	.82946		11	正	新しい学習	.62480			
24	力	試 合	.93650		21	題	試 合	.88953			
8	運	練習	.61749		5	努	練習	.86479			
18	負	新しい学習	.48834		15	正	新しい学習	.61026			
28		試 合	.45465		25	力	試 合	.55666			
3	運	練習	.86810	3	.86810	6	課	練習	8		.84611
13	正	新しい学習	.52318		16	負	新しい学習	.87312			
23		試 合	.77726		26	題	試 合	.62009			

因子負荷量 .55以上の項目を原則として因子の解釈に採用した。

評価を有している。

②感情的には、各群ともにやや非好意的・逃避的傾向にあるが、柔道自身を否定するものではない。

③特に、高校生、大学生では、武道感情を示した因子が抽出されたが、その価値評価も非常に高く、生徒・学生自身の柔道に対する基本的な姿勢が窺えた。周知の通り「格技が武道に改められた」という現実、及び柔道が学校体育の中で必修として位置づけられてから久しいということと併せて鑑みれば、③の結果は教育効果とも考えられよう。

いずれにせよ、尚更に柔道自身のイメージアップ（柔道の本質・特性をないがしろにはしていないが）のための具体的な方法論が研究され、そしてそれが確認されなければならない。また、そのためには、教育現場といわゆる研究機関との真の意味での融和が課題ではないだろうか。

### 3. 中学生、高校生、及び大学生の原因帰属様式の因子分析結果

Varimax 回転後の抽出因子及び因子負荷量を、中学生については表11に、高校生については表13に、大学生については、表15にそれぞれ示した。

この結果、中学生において解釈・命名可能な因子は、8因子であった。（回転後の貢献度の合計は、全分散の77.4%・表10、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は原則として0.55以上とした）。

高校生では、解釈・命名可能な因子は、10因子であった。（回転後の貢献度の合計は、全分散の72.5%・表12、因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は0.5以上とした）。

尚、大学生において解釈・命名可能な因子は、9因子であった。（回転後の貢献度の合計は、全

表13. 原因帰属因子に関する因子分析結果 (Varimax 回転後・高校生)

Table 13. Rotated factor loadings and naming of factors  
(attitudes toward judo among high school students).

項目 番号	帰 属 因	事 態		因 子 番 号	因 子 負 荷	項目 番号	帰 属 因	事 態		因 子 番 号	因 子 負 荷
		正 負	内 容					正 負	内 容		
4	能		練 習		.79632	10	努		練 習		.69657
14	正		新しい学習	1	.79521	20	負		新しい学習	6	.68300
24	力		試 合		.90274	30	力		試 合		.80361
9	能		練 習		.73604	3			練 習		.68777
19	負		新しい学習	2	.71532	13	運	正	新しい学習	7	.60161
29	力		試 合		.67997	23			試 合		.64922
5	努		練 習		.78789	2	先		練 習		.63302
15	正		新しい学習	3	.58809	12	正		新しい学習	8	.65283
25	力		試 合		.81003	22	生		試 合		.78047
7	先		練 習		.63373	8			練 習		.78036
17	負		新しい学習	4	.67008	18	運	負	新しい学習	9	.53888
27	生		試 合		.82360	28			試 合		.78047
6	課		練 習		.56137	1	課		練 習		.73403
16	負		新しい学習	5	.51961	11	正		新しい学習	10	.73843
26	題		試 合		.83065	21	題		試 合		.52950

因子負荷量 .50以上の項目を因子の解釈に採用した。

表15. 原因帰属因子に関する因子分析結果 (Varimax 回転後・大学生)  
 Table 15. Rotated factor loadings and naming of factors  
 (attitudes toward judo among university Students).

項目番号	帰属因	事 態		因子番号	因子負荷	項目番号	帰属因	事 態		因子番号	因子負荷	
		正負	内 容					正負	内 容			
3	運	正	練習	1	.69911	5	努力	練習	5	.82996		
13			新しい学習		.76911	15		正		新しい学習	.78534	
23			試合		.85194	25		力		試合	.86365	
8		負	練習		.66466	2	先生	練習		.84344		
18			新しい学習		.54765			12		正	新しい学習	.84009
28	試合	.77975	22	負	試合	.77665						
4	能	正	練習	2	.74420	1	課題	練習	7	.78928		
14			新しい学習		.87704			21		正	練習	.75841
24			試合		.87736			6		負	練習	.54301
9	能	負	練習	3	.85177	26	負	練習	8	.84589		
19			新しい学習		.71116			10		努力	新しい学習	.75067
29			試合		.88457						20	負
7	先	負	練習	4	.76318	30	力	練習	9	.79344		
17			新しい学習		.80511			11		課題	新しい学習	.73678
27			試合		.85140						16	正

因子負荷量 .50以上の項目を因子の解釈に採用した。

分散の74.4%・表14, 因子の解釈・命名における因子負荷量の基準は, 0.5以上とした)。

表11, 表13, 表15の通り, 各対象群の抽出因子は, 事態の正負と帰属因という点で特徴づけることができる。よって, 因子の命名についてもかなり明確に行うことができた。以下に対象群ごとの因子名を列挙する。

①中学生：第一因子から, 負事態の先生・能力因子, 正事態の能力・負事態の運因子, (以下正事態を正, 負事態を負と示す), 正一運因子, 負一努力因子, 正一先生因子, 正一課題因子, 正一努力因子, 負一課題因子の8因子

②高校生：正一能力因子, 負一能力因子, 正一努力因子, 負一先生因子, 負一課題因子, 負一努力因子, 正一運因子, 正一先生因子, 負一運因子, 正一課題因子の10因子

③大学生：正・負一運因子, 正一能力因子, 負一能力因子, 負一先生因子, 正一努力因子, 正一先生因子, 正・負一課題因子①, 負一努力因子, 正・負一課題因子②(新しい学習)の9因子である。

以上の結果は, 本質問紙によって中学, 高校, 大学といった幅広い柔道学習場面において, 原因帰属様式の測定が可能であることを示すものである。即ち, 本質問紙における原因帰属様式の構造的妥当性と信頼性の高さを示唆するものである。

#### 4. 帰属因尺度の平均得点及び群間差

表16. 各帰属因の平均得点及び群間の有意差検定  
Table 16. Factor mean score, standard deviation, and t-Test (attributional style).

帰属因	中学生 平均得点 S. D. ①	高校生 平均得点 S. D. ②	大学生 平均得点 S. D. ③	各群の T-TEST
正一能力	3.115 1.047	3.011 0.960	2.490 0.967	②>③*** ①>③***
負一能力	2.428 1.134	2.689 0.990	2.463 1.024	②>③***
正一努力	3.827 1.047	3.878 0.860	3.520 1.038	
負一努力	3.428 1.223	3.244 1.080	3.393 1.039	
正一先生	3.827 1.047	3.818 0.770	3.880 0.801	
負一先生	2.466 1.148	2.294 0.930	1.900 0.857	③>①** ③>②**
正一課題	3.625 1.146	3.287 1.060	3.217 1.070	①>②* ①>③*
負一課題	3.808 1.047	3.892 0.870	3.827 0.855	
正一運	3.284 1.143	3.391 1.020	3.457 1.113	
負一運	2.995 1.059	2.847 1.010	2.760 0.972	

その結果、各群で共通して、正事態における「努力」「先生」に対する得点がやや高いこと、負事態においては、「課題の困難さ」に対する得点が高いこと、及び「能力」に対する得点がやや低いこと、更に①の「先生」に対する高得点を裏づけるべく、「先生」の要因が低値であることが窺えた。そこで、これらの結果に対して考察を加え要約すれば以下の通りである。

①正事態での「努力」に対する帰属傾向が強く、負事態の「能力」に対する帰属傾向がやや低いということは、本調査での各群の被験者が柔道学習場面において望ましい原因帰属様式を有していることを示唆している。「成功事態での努力帰属傾向の強さが、達成動機水準と正の相関関係にある」と言われている<sup>3)</sup>ことなどは、このことを如実に物語っている。

②正事態での「先生」の帰属因の高得点、及び負事態での「先生」の帰属因に対する低値は、教師—生徒間の信頼関係の深さが反映した結果とも考えられる。

いずれにしても、「努力教示が原因帰属様式に影響を与えるとともに、無力感の形成を予防する」と言われている<sup>4)</sup>ように、教師が学習者の原因帰属様式に多大なる影響を及ぼしていることに相違はなからう。

③各群共に、負事態での「課題の困難さ」に帰属する傾向が強いという結果が得られたが、こ

因子分析によって明かにされた尺度で各群において基準とされた因子負荷量を持つ項目の合計平均得点によって帰属因尺度得点を構成する。

しかしながら、中学生の第一因子と第二因子については、その性格上帰属因ごと、すなわち2つに分けることとした。

また、大学生の第一因子、及び第七・第九因子は、正負混同したかたちで抽出されている。そこで、第一因子は正負それぞれに分離した形で採用し、第七・第九因子については両因子ともに正負の課題を示した因子ということから、それぞれに含まれる正の項目ごと、負の項目ごとにまとめることとした。よって各群ともに10の下位尺度によって研究を進めることとした。

尚、中学生、高校生、大学生それぞれの帰属因尺度得点及び各群間の T-TEST の結果は、表16に示した。

れらはワイナーの示す通り望ましいとは言い難い。つまり、負事態の原因を、ワイナーの言うところの「課題の困難さ」に帰属する傾向が強いということは、柔道に対する無力感の形成を助長させ得ると考えられるからである。

ところで、柔道は、相手と直接組み合っている運動だけに、特に、初心者段階では、相手の技術的な要因のみならず、相手の体力的な要因も直接的に影響してくると思われる。ともすると、身体の小さい者や体力的に劣る者は、柔道授業のなかで、失敗経験を重ねることにもなりかねない。③の結果は、そのことへの警鐘とも言えようが、学習者一人一人が成功経験をj得るような授業展開の更なる研究は今後の課題とも言えよう。

以上、各群で同様に得られた傾向について既述のような考察を行った。しかしながら、T-TESTの結果が示すように、対象間で異なる傾向も窺えたので、その原因についても以下に若干の推察を加えたい。

①大学生の正事態における「能力」への帰属傾向が、他に比較して弱いことが示唆された。これは、社会的認傾向が年齢とともに進むことを示しているのかも知れない。また、自身の「能力」に対する認知が、より客観的になるためとも考えられる。

②中学生の正事態における「課題の困難さ」への帰属傾向が、他に比較して強いことが明確にされた。これは、中学生で、初めて柔道に触れることが原因しているからではないだろうか。つまり、学習者が未知への成功経験を「課題の困難さ」、いわば相手との相対関係で認知せざるを得ないからである。この結果も、柔道が対人的な競技であるが故のものであろう。また、ワイナーの示すように、正負両事態を外的な要因に帰属することは望ましくないということであれば、柔道学習の初期段階で、できるだけ、努力に帰属させるような成功経験・教示が重要であることは、言うまでもない。

#### 5. 柔道に対する態度と原因帰属様式との因果関係

表17. 重回帰分析の結果 (中学生)

Table 17. Regression analysis (junior high school students).

従属変数	重回帰係数の T 値						
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7
正—能力							
負—能力							
正—努力							
負—努力						-2.158*	
正—先生	2.693**						
負—先生	-2.167*						
正—課題				2.513*			
負—課題					2.254*		
正—運							
負—運							
重回帰係数	.722***	.478	.483	.516	.438	.453	.575

\*T値は、統計的に有意水準が得られたもののみ記載

\* . . . . p < .05

\*\* . . . . p < .01

\*\*\* . . . . p < .001

表17 (中学生), 表18 (高校生), 表19 (大学生) それぞれは, 態度の下位尺度を従属変数, 帰属因尺度を独立変数として, 一括投入法による重回帰分析を行った結果を示してある。

その結果, 中学生では①柔道に対する認知的側面の価値評価が高い程, 正事態における「先生」

表18. 重回帰分析の結果 (高校生)

Table 18. Regression analysis (high school students).

従属変数 独立変数	重回帰係数のT値					
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
正一能力	2.743**				2.714**	
負一能力						
正一努力			2.081*	3.437***		2.100*
負一努力						
正一先生			3.049*			
負一先生					-1.898***	
正一課題	-1.948*		-3.063***	-2.685**		
負一課題						2.564*
正一運		2.536*				
負一運						-1.979*
重回帰係数	.298***	.272*	.337***	.289***	.336***	.250*

\*T値は, 統計的に有意水準が得られたもののみ記載

\* . . . . p < .05

\*\* . . . . p < .01

\*\*\* . . . . p < .001

表19. 重回帰分析の結果 (大学生)

Table 19. Regression analysis (university students).

従属変数 独立変数	重回帰係数のT値					
	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6
正一能力						
負一能力						
正一努力	3.083**		2.404*	2.702**		2.100*
負一努力						
正一先生	2.409*					
負一先生	-3.259**			-3.206**		
正一課題	-2.631**					
負一課題						2.564*
正一運						
負一運			-1.964*			
重回帰係数	.679***	.2772	.435*	.496**	.393	.410

\*T値は, 統計的に有意水準が得られたもののみ記載

\* . . . . p < .05

\*\* . . . . p < .01

\*\*\* . . . . p < .001



への帰属傾向が有意に高いこと、及び負事態における「先生」への帰属傾向が有意に低いことが認められた。②感情的には、柔道に対して辛い感情が強い程、正事態での「課題の困難さ」に対する帰属傾向が強いということ、及び柔道に対して否定的な程、負事態での「課題の困難さ」に対する帰属傾向が有意に強い事が認められた。

高校生では、認知的側面及び肯定的感情の価値評価が高い程、正事態において、「努力」や「能力」等の内的な帰属傾向が有意に強いこと、及び「課題の困難さ」に帰属する傾向が弱いことが示唆された。

大学生では、高校生同様、認知的側面及び肯定的感情の価値評価が高い程、正事態における「努力」への帰属傾向が有意に高い事が明確にされた。

正負両事態を「課題の困難さ」に帰属する傾向が強い者ほど、アパシーに陥り易いと言われていたりすること。及び正事態での「努力」帰属傾向と達成動機水準との間に正の相関関係が存在する<sup>7)</sup>こと。この2点を併せて鑑みれば、以上の結果は、いずれも、学習者の達成動機水準の向上が柔道に対する態度を好意的方向へ変容させる可能性があるということを示唆している。

高橋ら<sup>8)</sup>や、尾形ら<sup>9)</sup>が従来から、学習者の柔道に対する態度の好意的方向への改善の必要性を指摘しているが、まさに、以上の結果は、そのための一助となり得る。いずれにしても、態度と原因帰属に関して、今後更なる実証的研究を進めることが大きな課題であろう。

#### IV. まとめ

中学校、高校、大学それぞれの柔道学習場面における学習者の柔道に対する態度構造、並びに原因帰属様式を明確にするとともに、それぞれの尺度間の因果関係を明らかにするために研究を進めてきた。その結果を要約すれば次の如くである。

(1) 中学生、高校生、及び大学生それぞれで抽出・解釈された態度構造は、質問紙の性格上、認知的側面と感情的側面に大別された。また同時に、3群間の類似性も明らかとなった。

(2) 柔道が、精神や身体に及ぼす効果である認知的側面に関しては、どの群ともにやや高い価値評価を有している。また、感情的には、各群ともにやや非好意的傾向・逃避的傾向にあるが、柔道自身を否定するものではない。更に、各群ともに武道感情を示した因子が抽出された。

(3) 本質問紙の原因帰属様式に関する項目は、かなりよい単純構造を示すことが明らかになった。このことは、本質問紙が、中学校から大学の幅広い柔道学習場面における原因帰属様式を測定する目的にかなうものであるということを示している。

(4) 各群ともに正事態での「努力」に対する帰属傾向が強く、負事態の「能力」に対する帰属傾向がやや低いということが認められた。特に「努力」帰属に関する結果は、柔道学習に対する本被験者の高達成動機水準を示すものでもある。

(5) 各群ともに正事態での「先生」の帰属因の高得点、及び負事態での「先生」の帰属因に対する低値が認められた。これは、教師—生徒間の信頼関係の深さが反映した結果とも考えられる。

(6) 各群における柔道に対する態度と原因帰属様式との因果関係から、以下のような示唆を得ることができた。つまり、学習者の達成動機水準の向上が柔道に対する態度を好意的方向へ変容させる可能性があるということである。

#### 引用・参考文献

- 1) バーナード・ワイナー著、林保・宮本美沙子監訳：ヒューマンモチベーション—動機付けの心理

- 学一, 金子書房, 330, 1989.
- 2) E. L. デシ著, 安藤延男・石田梅男訳: 内発的動機付け, 誠心書房, 357, 1980.
  - 3) 原岡一馬: 態度変容の心理学, 金子書房, 423, 1969.
  - 4) 伊藤豊彦: 「帰属教示が運動パフォーマンスに及ぼす影響について」体育学研究, 28-4: 299-308, 1984.
  - 5) 伊藤豊彦: 「原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響」体育学研究, 31-4: 263-271, 1987.
  - 6) 川嶋直司・貝瀬輝夫・高橋進: 「柔道学習が心理的諸側面に及ぼす影響—高校生と中学生の比較から—」第25回日本武道学会口頭発表, 1982.
  - 7) 宮本美沙子: 達成動機の心理学, 金子書房, 18-30, 1984.
  - 8) 尾形敬史: 「柔道に対する意識の研究(第一報)—中学生を対象として—」武道学研究, 17-1: 92-94, 1985.
  - 9) 高橋進・貝瀬輝夫・矢野勝: 「柔道における高校生の意識構造について」武道学研究, 17-1: 92-94, 1985.
  - 10) 高橋進: 「柔道授業が高校生の意識に及ぼす影響について—学年差に着目して—」関東学園大学紀要, 12: 107-124, 1987.
  - 11) 高橋進・矢野勝: 「柔道に対する中学生の態度について」関東学園大学紀要, 14: 137-144, 1988.
  - 12) 高橋進・貝瀬輝夫・菅原正明・森藤才・若林眞: 「大学生と高校生の柔道に対する態度の差異について—認知的側面と感情的側面の比較—」武道学研究, 22-1: 33-44, 1989.
  - 13) 高橋進・木村昌彦・菅原正明・斉藤聡: 「大学一般体育実技履修者の原因帰属様式について—柔道履修者の場合—」関東学園大学紀要, 18: 145-156, 1991.
  - 14) 高橋進・高瀬博・天野勝弘: 「柔道学習に対する高校生の原因帰属様式について」群馬栃木保健体育学研究, 11: 13-21, 1991.
  - 15) 高橋進・木村昌彦・川嶋直司・斉藤聡: 「柔道学習に対する原因帰属様式が運動に関する自己の有能感に及ぼす影響について—男子高校生の場合—」関東学園大学紀要, 19: 101-107, 1992.
  - 16) 高橋進・濱田初幸・木村昌彦・若林眞: 「柔道学習者の原因帰属様式について—中学生の場合—」関東学園大学紀要 Liberal Arts, 1: 93-102, 1993.
  - 17) 高橋進・高瀬博: 「柔道授業における高校生の態度変容について—学習ノートを使用した場合—」群馬栃木保健体育学研究, 12: 9-18, 1993.
  - 18) 田中国夫: 新版現代社会心理学, 誠心書房, 281, 1977.